

登山活動が自然環境に与える影響（ヒトと犬の比較）

懸念される環境破壊	登山者の場合	犬の場合	備考
A、雑草の種を運ぶ	靴裏の土に含まれたり、ズボンにくっついた種子が持ち込まれる (対策) 種子が着きにくい素材のズボンを履く 登山前に靴の泥を落とす	体毛に付着した種が持ち込まれる (対策) 種子が着きにくいレインコートを着用 登山前のブラッシング	道路建設や小屋の増改築で下界から持ち込まれる建築資材、土砂に含まれる。 ゴミにつられて平地から移動してきたカラスや狐、野良犬の糞を媒介として拡散 風や野生生物（特に鳥）による運搬。
B、踏み荒らし (主に、土が剥き出しの未整備の登山道を想定)	写真撮影、盗掘を目的とした踏み込み。 ぬかるみを避けるために道外へ踏み込む オーバーユースの山、集団登山では道の外に踏み込むケースが多い (対策) 監視員の設置、増員 木道、階段設置などによる登山道の整備 オーバーユースの分散化	飼い主がコントロールできない犬をノーリードにした場合のフリーラン。犬の足の面積そのものは人より小さいが、運動量が多い犬は人間並みに踏み荒らすことがある (対策) 犬を確実にコントロール下に置く。 コントロールできない犬はノーリードにしない	冬期の山スキー、スノーシューについては、積雪量、踏み込むフィールド、人数を配慮する必要あり 野生生物によるもの（獣道など）
C、未知の病原菌・寄生虫の持ち込み	脊椎動物とヒトとの間で移行し得る全ての感染症、伝染病をズーノーシス(人畜共通感染症)と呼ぶが、人間や犬が持ち込む病原菌・寄生虫が野生生物に与える影響は未知の部分が多く、研究が待たれる。 一般的に、雑食で様々な化学物質を摂取している人間の排泄物は、主食が肉である犬のそれよりも野生生物に対するリスクが高いと考えられる。 一方、犬は系統的に野生動物に近いためリスクが高いと考えられる。かつて日本狼の絶滅の理由の一つに狂犬病が挙げられた。しかし、犬を番犬としてではなく家族の一員として一緒にすむようなスタイルが増えるにつれ、犬の病気に対する飼い主の意識が変わってきているのも事実で、狂犬病は日本から無くなったし、ジステンパなどの病気に対する予防接種も一般的になってきている。		注) ライチョウなど高山帯に住む野生生物には免疫を持っていない種類がいる。 野生生物の病気の原因については、蚊などの昆虫やネズミ、カラスを媒介とする可能性もあり、原因の特定は困難なことが多い。しかし、立山のライチョウで見つかったウイルスに関して、朝日新聞の見出しは何故か「ペット？」とされている。本文を読むと原因は不明となっておりペットに対する朝日新聞のミスリードである。
C、排泄物・ゴミ	いわゆる「雉打ち、お花摘み」 垂れ流し、埋め立てといった山小屋のトイレの処分方法 タバコ、空き缶、ゴミのポイ捨て。 (対策) 携帯トイレによる排泄物の持ち帰り 山小屋のトイレの改良 野外排泄をしない ポイ捨て禁止のマナーの徹底、強化 清掃登山の推奨 海外登山で使った用具の洗浄と殺菌	盲導犬、介助犬、作業犬などを除けば、一般的に排泄のコントロールが疎らされていない。 (対策) 糞の持ち帰り（人間よりは一般的） おしっこシートの利用 コマンドによる排泄のコントロール 定期的な予防接種と健康管理。 病気の予防。野外で飼育されている犬は特にフィラリアの予防が重要。犬は外に繋いでおくものという意識の飼い主が多い地域では健康管理にも無頓着な場合が多い。	野生生物の排泄物（カモシカやタヌキの溜糞など）
D、野生生物への脅威	ヒトは野生生物が最も警戒する動物 集団登山、大声、ホイッスルなどの脅威 山スキーのエッジ音は猛禽類の羽音に近く 雷鳥などには脅威 残飯などを追って平地からカラスが高山帯にまで上がってくることがあり、結果的に野生生物を脅かす 餌を与えることによる食性の変化、病気等 (対策) 登山者の分散化 野生生物と距離をおく	猟犬、中、大型犬のフリーランは野生生物への脅威が人間より大きい 鳴き声による威嚇 ライチョウは人を怖がらないが、犬は天敵 (対策) フリーランさせない 無駄吠えをさせない	注) 踏み荒らしの項目と重複するが、オートバイ、マウンテンバイク、冬期のスノーモービルなどは、利用する地域に配慮する必要あり

【補足】

影響の度合いを3段階で評価しています。が多いほど影響大。は考慮すべきでないものです。

山での犬を禁止する理由として「犬が嫌いな人がいる」ということを挙げる場合がありますが、それは「山でのタバコ」「集団登山のおしゃべり」などと同様、「好き嫌い」の範疇を出ないため、この表には入れませんでした。ただし、犬がノーリード、かつ、飼い主のコントロール下に無い場合、弁当を広げている人に近寄ったりすることもあります。これは「動物の愛護および管理に関する法律」に違反した行為です。このような行為が犬を締め出す動機の一つになることもありますので、犬連れ登山者は、飼い犬をきちんとコントロールしましょう。日本では司法の場でもノーリードとノーコントロールが同じ意味で使われるケースがありますが、実際には意味は大きく違います。例えばスペインではきちんと躰られている犬は原則としてノーリードです。リードをつけている犬、特に大型犬は、逆に危険な犬と判断され敬遠されます。リードをつけているかどうかは問題なのではなくコントロールできないことが問題なのだとことを飼い主もそうでない方も理解を深める必要があります。

この表は各種新聞記事、研究論文の検索や関係者への取材を通してO-DOGが作成したものです。無断転載を禁じます。

作成：日本アウトドア犬協会（O-DOG）